

『道ゆきぶり』の世界

一 出立

永年の間、南朝の実質的な指導者の地位にあつた北畠親房が、六十二歳の波乱に満ちた生涯を閉じたのは、文和三年（一三五四）のことであつた。幕府の内訌に乗じて、一時は京都の奪回に成功した南朝の勢いも、これと符節を合わせるかのように翳りを見せはじめた。後醍醐天皇の時代から諸皇子を分遣し、経営に努めてきた地方拠点の多くはすでに失われ、今また畿内における退勢も決定的なものとなつた。

このような中で、ただ一つ南朝が優位を保っていたのが九州であつた。延元元年（一三三六）、父後醍醐の命により征西大將軍として九州に向かつて懐良親王は、伊予の忽那島を経て豊後に渡り、さらに数年を薩摩の谷山氏のもと

角 重 始

で過ごしたのち、ようやく正平三年（一三四八）に至つて当初より頼みにしていた肥後の菊池氏の本拠隈部城に入つた。この間に要した歳月は、そのまま該地域における南朝勢力の苦難の跡を物語っている。しかし、懐良に続いて足利直冬が肥後にのがれてきた頃から、情勢は大きく変化しはじめた。直冬によつて持ち込まれた九州三分の形勢は、この地域特有の領主間の利害対立ともからみながら複雑な展開をたどつた。そして数年の抗争を経るうちに、直冬党は解体し、鎮西探題一色道猷も長門に追われ、九州北部は懐良一人の掌中に入ることになった。

九州在住二十年におよんだ道猷が、少弐・大友・島津氏といった独立性の強い守護勢力や伝統的な土着豪族たちの厚い壁に阻まれ、ついに幕府軍の総帥らしい働きもみせず去つていったのは文和四年のことであつた。それからしばらくして、後任の鎮西探題には斯波氏経が任じられたが、

豊後の大友氏以外にめぼしい与党をもたない氏経では、九州経営の実をあげることはむつかしく、そのうちに菊池氏に追われてこの地を離れた。次に探題として派遣された渋川義行に至っては、備後の辺に滞留したまま九州の地を踏むことすらできなかった。

こうして歴代の探題派遣がごとく失敗に帰したあとを受けて、新たに九州探題（了俊以後は、この呼称が一般化する）に選任されたのが今川了俊であった。失われた幕府権威の回復と大宰府を根拠地に全盛を続ける南朝勢力の制圧、この当面する二つの課題に立ち向かうには、それにふさわしい力量の人物を起用する必要があった。そのため人選はかなり難航したが、管領細川頼之の推薦もあって応安三年（一三七〇）六月ころには引付頭人の今川了俊に白羽の矢が立ったのである。¹⁾

これを受けて、了俊はさっそく九州下向の準備にとりかかった。七月一日には阿蘇惟村と田原氏能に充てて西下のことを告げるとともに合力を依頼しており、十月二十七日付の書状では宇都宮経景にも同様のことを伝えている。²⁾了俊進発の報は、探題不在のまま劣勢に置かれていた幕府軍を奮い立たせ、九州からわざわざ了俊のもとに馳参する者も相次いだ。⁴⁾ 出立を間近にひかえた応安四年正月にも、阿蘇惟村・都甲三郎四郎・木付頼直らの助勢を求めると、⁵⁾ 前任者たちの轍を踏まぬよう周到な手配を重ねつつ、了俊

は強い決意をもって二月二十日の早曉、任地に向け京を立つたのである。

二 行程——紀行文として——

『道ゆきぶり』の記述は、「きさらぎ廿日の夜ふかく」京を出立するところから始まる。そして十一月二十九日に長門赤間関に到り、九州渡海を目前にしたところで終わっている。十カ月余を要した西下の旅の目的は、数次にわたる滞留の事実が示すとおり、あくまでも軍旅を整えることにあつたが、了俊の筆づかいはあたかもそれを覆い隠すかのように、風雅な紀行文の体裁をとっている。本節ではそうした作品の性格をふまえながら、了俊のたどった行程を追ってみた（図1参照）。

家族との別離や前途に対する不安な思いの交錯するなか、京を立つた了俊は西国街道を一路西へと向かう。最初の宿駅山崎（京都府乙訓郡大山崎町）で一夜を過ごしたのち、摂津国に入り、芥川（高槻市芥川町）・瀬川（箕面市瀬川）・昆陽野（伊丹市昆陽）を経て、武庫の山（西宮市の甲山）に到る。そこで地元の人から「武庫」の地名が、神功皇后が三韓より帰国した際に甲冑を埋めたことに由来するとの話を聞き、皇后の故事を思い起して、⁶⁾ その武運にあやかるべく歌一首（このたびもあらし波ぢのさはりな

く猶吹をくれむこの山風」を詠んでいる。また、旅立ちの名残惜しい気持ちで「むこの浦の入江のす鳥」で始まる万葉の古歌⁽⁷⁾にかけて、一首「むこの浦の入江のす鳥いかにしてたつ跡にしもとまる心ぞ」に詠み込んでいる。打出浜（芦屋市打出町）を過ぎ、蘆屋の里ではかつてこの地に住まいした在原業平に思いをはせながら、御影の松原⁽⁸⁾（神戸市東灘区御影町）にある北野宮に詣でて歌一首（「君がためくらかるまじき心には神も御影もうつさざらめや」）を詠んでいる。ついで生田川のほとりにある処女墓にまつわる悲話を回想しつつ、湊川（神戸市兵庫区・中央区）に着いた。翌朝、京からの見送りの人とも別れを告げ、了俊の旅はいよいよこれから本格的に始まる。

播磨路を行く了俊の旅情を慰めてくれたのは、名所旧跡の数々であった。須磨・明石のさりげない景色の中に「源氏物語」の世界をしのび、間近に見える淡路島の姿に心を動かす、万葉にも歌われた「印南野の浅茅」に寄せて、一首（「勅なれば國治めにといなみ野のあさぢの道も迷はずらなん」）を詠んでいる。さらに清水・金ヶ崎（明石市魚住町）を過ぎ、飾磨の里（姫路市）に到る。その近くにある石塚をめぐる奇習に興味をそそられ、恋の丸（龍野市揖西町小犬丸）という地名からは京に残してきた妻のことを思い起こしている。

そうするうちに、旅は吉備路へと移っていく。備前焼の

生産地として知られる香登の里（備前市）を通り抜け、家々が軒を連ねて賑わいたつ福岡（岡山県邑久郡長船町）に着いた。次の日は辛川（岡山市）に泊り、翌朝には歌枕としても名高い吉備の中山を訪れ、その東・西の麓に鎮座する備前一宮の吉備津彦神社と備中一宮の吉備津神社にそれぞれ上矢を奉じたのち、軽部川・勢山などを越えて矢掛の里（小田郡矢掛町）に着き、そこでの思いを一首（「ものふの猛き名なれば梓弓やかげに誰かなびかざるべき」）に託している。

備後国に足を踏み入れる前あたりから、一見すると文事風韻の旅かと思ふほどの筆致の中にも次第に現実の影がちらつき始める。それはこれから約四カ月近くも、尾道に滞在しているという事実と深く関わってくる。了俊の旅は、その行程の半ばに及んでようやく本来の目的に沿って動き出したのである。もちろん、生活の匂いに満ちあふれた尾道浦の描写にも、歌島（尾道市向東町・御調郡向島町）にまつわる伝承や自然に湧き出る歌心を書き留めていく態度にも格別の変化は認められない。しかし、それに続けて次のような述懐が洩らされていることを見過ごすわけにはいかない。

さても備後は鏡にすべき文もすくなく、たまたましみのすみかより尋いでたる国文も、それをしるべとするほどのことはりをさへしらぬ人のみ侍れば、をろかな

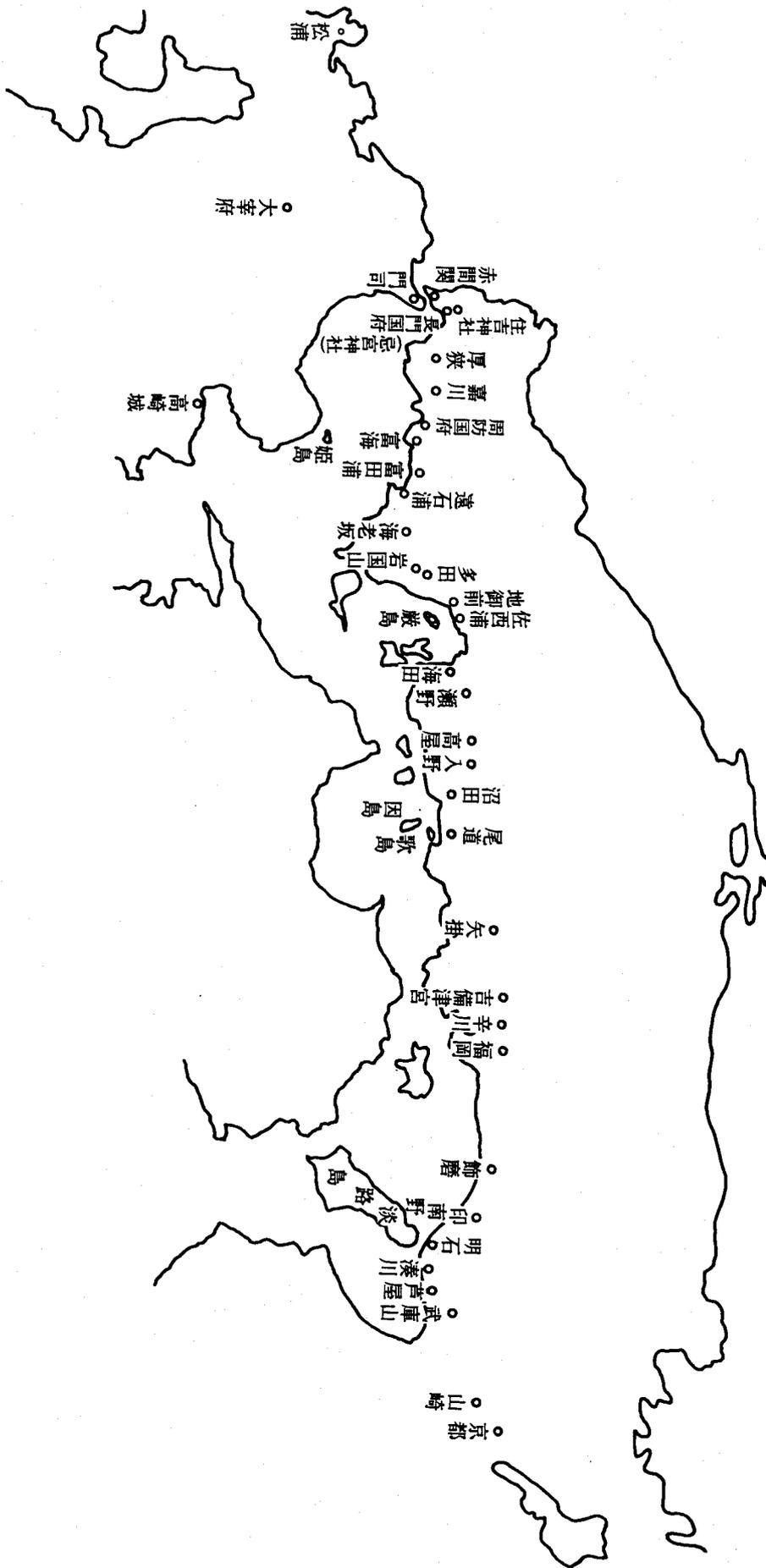


図1 「道ゆきぶり」の行程要図

るころにもあざむかれ侍るかな。かべの中石の函の中におさめける世もかばかりやは侍るべき。

文意はやや難解であるが、そこで言わんとしているのは、およそ次のようなことであろう。つまり、了俊がいくら理を尽くして誘っても、備後の国人領主たちの多くはなかなかその麾下に馳せ参じようとしなない。いたずらに時を費やすばかりで、一向に目算が立たないことへの苛立ち、我々はその初めに了俊の素顔を垣間見る思いがする。了俊は九州下向に際して、まず備後守護職に補任されている⁽¹¹⁾。彼の長期にわたる備後滞留の目的は、守護としての立場を利用して国内の領主たちの動員工作を行うことにあつたのであり、四カ月という期間はそれが必ずしも順調に運ばなかつたことを暗に物語っている。

五月十九日に了俊一行は尾道から安芸国の沼田（豊田郡本郷町）に移った。途中の吉和（尾道市吉和町）あたりで夕方になり、鯨島・布刈の浦を海上に見ながら糸崎（三原市糸崎町）に到ると、向かいには干潟を隔てて因島である。さらに国堺を過ぎて、沼田川の河口近くに到着するころには、すっかり日は暮れ落ちていた。これからまた三カ月余を、了俊はこの地で過ごすことになる。それだけに沼田に関する部分の記述は、当地の風物をたくみに織り込みながら了俊の心情の一端をもろぞかせた興味深いものとなっている。

たとえば、次のような文章がある。

この所は寿永のむかしまでは海の底にて侍けるとて、石のかたはらなどにかきといふものからうち付ためり。はなれたる山どもこゝかしこにしげりていとおもしろし。

沼田川下流域の三原市沼田東町一帯は、「沼田千町田」とよばれる広大な水田地帯であるが、かつては満潮になると海水が入り、干潮時には干潟を形成する塩入荒野であつた。その後、嘉禎四年（一二三八）に沼田荘地頭小早川茂平が領家西園寺氏の許可を得てこの地の干拓に乗り出し、塩堤を築くことによりそこを新田に変えていった。現在の片島（中世では潟島と書く）という地名は、そうした入海当時の干潟の島であつたものの名残であるが、右の記述でもそれらが小丘陵のかたちをとって付近に点在している様を的確にとらえている。

また、川に沿つた西側の社叢の中にある甌天神は、菅原道真が筑紫に流されるときにこの地で用いた甌に由来し、その傍らには道真が自ら掘り出したと伝えるよい清水があることを聞いて、大宰府攻略に向かう我が身との浅からぬ因縁に思いをいたし一首（「我祈るたのみもことにまし水の浅かるまじき恵みをぞまつ」）を詠んでいる。その並びにひっそりと立つ草葺の堂（沼田城跡）からは、かつてここに拠つた名族沼田氏と平教経との間で繰り広げられた激

戦の跡をしのび、南方に鎮座する男山八幡宮（弁海神社）には武運を祈っている。そして一心に神の加護を願いつつ、七夕に因んで七首の歌を梶の葉に書き記した。それらは「つくしの名所を少々よみ入侍るなり」とあるように、七夕伝説にことよせた座興をよそおいながら、実は今後の具体的な戦略を語っている点に特徴がある（たとえば、「契ありて秋はかならずたなばたの松浦の河を渡るべきかな」。こ

うした直截的な表現がとられた理由としては、了俊の沼田滞留中に子息義範が豊後高崎城に向けて進発したり、弟頼泰が肥前松浦に赴く準備を開始するなど、これまで慎重に練られてきた作戦行動がようやくここにきて実施に移され、九州での戦いを今まさに実感し始めたことが挙げられる。

八月二十九日に沼田を後にした了俊は、小野篁生誕の地と伝えられる竹林寺の所在する入野（賀茂郡河内町）を過ぎ、高屋（東広島市高屋町）に着いた。翌日は木々の色づき始めた大山峠（東広島市八本松町宗吉）を越えて、瀬野（広島市安芸区瀬野川町）を通り海田浦（安芸郡海田町）に到る。ここに二十日ばかり留まったのち、九月十九日の有明の月とともに広島湾の干潟を横切り佐西浦（廿日市市）に着いた。翌二十日は厳島に参詣する。回廊や鳥居の海中に浮かぶ姿、入江や浦々のたたずまいに心を奪われているうちに、夕暮れが迫ってきた。そこで御前の浜に漕ぎだし

て、この日のために京から持参してきた仏舍利二粒を海に投じ、所願成就の祈りを捧げた。荘厳さをたたえた厳島神社の姿にあらたな感動を覚えつつ佐西浦に帰り着いた。

二十一日の朝早く佐西浦を出発して、地御前神社（廿日市市）の西干潟から山路に分け入り、しばらく行くと大野山中（佐伯郡大野町）に着いた。そこから山を下って大野浦に出ると、沖合には今朝佐西浦を出帆した「友の大船ども」の姿が見えた。了俊に随行してきた九州の諸豪族たちの乗る軍船と思われるが、「道ゆきぶり」の中では珍しい、軍勢の動きについて触れた部分である。そこからふたたび山路に入り、津葉（大竹市玖波町）・黒河（同黒川町）を経て、周防との国界である大谷（大滝川、現在の小瀬川のことか）を過ぎ、その日は多田（岩国市大字多田）に泊まった。

翌二十二日は『万葉集』に「周防なる磐国山を越えむ日は手向よくせよ荒しその道」（巻四一五六七）と歌われた、山陽道の難所の一つ岩国山（現在の欽明路峠）を越えて海老坂（山口県熊毛郡熊毛町呼坂）の寺に泊まる。そして二十三日には、遠石八幡宮（徳山市）に詣でて上矢を奉じ、夕暮れ時に富田浦（新南陽市大字富田）に着いた。

二十四日は周防国府（防府市）までの行程である。山陽道は富田からしばらく山路をとるが、今でも椿峠（徳山市大字戸田）の頂上付近に立つと急に視界が開けていくのに

驚かされる。眼下に広がる瀬戸内海の眺めは、周囲に島影がないせいもあって、これまでとはどこか違った感じを抱かせる。そこから目を遠くにやると、豊後国の嶺々をとらえることができる。その景色を了俊もまた感慨深げに見入っている。

道のほども南はうすみいでたるすゑに嶺どもの墨絵にかきたるやうにみえたる。そのふもとに大なる島は、姫島とて豊後の国なるべし。高崎の城などいふも雲をはるかにうちかすみつゝみえたり。かのすみ所など思ひやらぬにしも侍らず。

そこに姫島とあるのは国東半島の北部四kmの海上に浮かぶ小島のことであり、高崎城とは高崎山（大分市大字神崎）の山頂近くに築かれた城を指す。姫島はともかく、別府湾の内懐にある高崎城が実際に見通せるはずはない。にもかかわらず、それが見えたと記されているのは、ひとえに心眼のなせるわざにほかならない。「かのすみ所など思ひやらぬにしも侍らず」との熱い思いが、幻の城を了俊の目蓋に焼き付けたのである。

そのあたりの事情をもう少し詳しくみていこう。了俊が立てた九州経路の方針とは、およそ次のようなものであった。懐良親王や菊池武光らの守る征西府の所在地大宰府を攻撃占領するためには、まず子息義範を東方豊後に派遣して大友氏とともに菊池氏の背後を窺わせ、ついで弟頼泰を

西方肥前に配して松浦党と結び大宰府を攻略させる。そして自らは中央豊前を進入路に選び、三方面から大宰府を攻撃し一挙にこれを抜くという計画である。¹⁴ こうした戦略構想の中で、了俊の豊前進入路を確保するためのキーポイントとして位置づけられたのが高崎城をめぐる攻防であった。了俊が沼田に滞留中の六月二十六日、義範は豊後・豊前の軍勢とともに高崎城に向けて海路尾道を発ち、七月二日夜に入城を果たしている。義範勢は七月二十三日に菊池武光の若党平賀新左衛門尉が構える国東郷の要害を攻め落としたが、その報を聞いて武光の子息菊池武政が急遽豊後に救援に向かっている。さらに八月六日には武光自らが伊倉宮を奉じて高崎城に攻め寄せ、以後翌年の正月二日までの間に百余度もの交戦が記録されることになる。¹⁵ 義範は了俊の九州渡海までなんとかこの城を持ちこたえたが、それはまさに死力を尽くした戦いであった。「かのすみ所など思ひやらぬにしも侍らず」という言葉には、雲居はるか彼方にある息子の安否を気づかう父親の情がこめられているのである。

椿峠を下ったところを富海（防府市大字富海）という。それからさらに橘坂（現在の浮野峠）を越えて周防国府に入る。土居八町とよばれた国府城はもともと国衙を中心に発達してきたが、この当時には天神山の南麓に鎮座する松崎天神と社前に開けた宮市の方にその賑わいを移し、明ら

かに中世都市としての相貌を示すようになっていた。また三田尻の湊には多くの舟が出入し、桑山から鞠生松原にかけては景勝地が広がり、付近の潟浜では塩焼きも盛んに行われていた。

周防国府で過ごした十日余の間に、大内氏の協力を取り付けることに成功した了俊は、満ち足りた思いで十月七日にそこを出発した。わずか半月ほど前には、富海を見て「此海づらはなみいとたかし、是より外の海になりぬとぞ申める」と心の内の不安を隠せなかつた了俊が、今は「あしべのたづの明ぬとなくこゑ」をのどかに聞き、「梅やさくら」ときならぬ花」の咲き競うのを面白く眺めつつ、佐波川河口の干潟の路を往くのである。大前浜（防府市大字大崎）・田島（同大字田島）から岩淵（同大字台道）を経て、樫野川河口にある名田島（山口市大字名田島）の干潟を通り、対岸の香河（同大字嘉川）に着いた。

八日は雨の中、「小夜の中山」を思い起こさせるような山路を越えて厚狭の郡（厚狭郡山陽町大字郡）に到り、板垣の城の傍にある寺に泊まった。翌九日は霰混じりの雨が途中から雪に変わるといふ悪天候をついて、埴生（山陽町大字埴生）・うすは潟（下関市大字津井）・小島（同大字小月町）と打ち過ぎ、今回の旅の目的地にほど近い長門国府（同大字豊浦村）に入った。そして了俊は、二カ月余をこの国府付近に留まっている。

九州の地を指呼の間に臨みながら、滞留が長引く結果となったのは、最終的な陣立に思わぬ時間を要したことにあつた。とくに肥前松浦に向かう予定の頼泰の軍船が、順風を待ちわび当地で足踏みを続けていたことは、それが戦局全体にも悪影響を及ぼしかねないだけに了俊の悩みも大きかつた。そして、神功皇后ゆかりの忌宮神社や長門国一宮の住吉神社に歌を奉り、ひたすらその効験を念じるうちに、十一月十八日に至つてようやく願意が届き、折からの東風に乗つて福浦島（同彦島福浦町）に停泊中の松浦船が出帆したのである。その後松浦からやってきた使僧たちの話によれば、あまりに船の到着が遅いために、現地の人びとの苛立ちは極限に達し、「心ごころの議定」をする者も出始めていたという。まさしく「ひとへに松浦のいくさのさだめを又あらためさせじと神々のはからはせ給けるなるべし」という言葉が示すとおりの際どさであつた。

了俊も自らの渡海準備のため、十一月二十九日に国府を出て赤間関に移つた。それまで心に懸かっていた頼泰の船出を見届けた後だけに、そこでの見聞をもとにしながら、早鞆の瀬戸にまつわる伝承、阿弥陀寺（現在の赤間神社）の謂われ、師走を彩る忌宮神社の御齋祭や門司和布刈神社の神事のことなどを書き留める了俊の態度には、またいつもの余裕が感じられる。そして『道ゆきぶり』の本文は、「もし其比（筆者注、師走晦日の和布刈神事）まで此とこ

るに待らば、行すゑの物語にもし侍てまし」という一文で幕を閉じる。実際に了俊が門司赤坂陣に向けて発ったのは十二月十九日のことであつた。

三 軍 略——裏面史を探る——

土地土地の勝景を愛でながら、歴史や伝承に思いをよせ、習俗に関心を寄せ、また時どきの感慨を歌に託して詠み込む。そうした『道ゆきぶり』の記述ともあいまって、応安四年（一三七一）の丸一年近くをかけて山陽路を下つていく了俊の旅は、傍目にはまことに悠然としたものに映る。しかし、二節でも触れたように、当代一流の教養人今川了俊の面目を遺憾なく伝えるこの紀行文には、同時に重任を負つて戦場に向かう武將了俊の素顔も見え隠れしており、そこでの心の揺れが逆に作品の奥行を深めることにもなっている。本節では、作品上にはあまり現れない了俊の軍略の面に焦点を当て、いわば『道ゆきぶり』の裏面史といったものを探ってみよう。

了俊のたどつた行程を見て、まず気がつくことは、尾道・沼田・海田・周防国府・長門国府・赤間関と、数次にわたり長期滞在をしている事実である。一口に長期といつても、尾道のように約四カ月に及ぶものから、周防国府のように十数日のものまで、日数にはかなりの幅があるが、そ

れぞれに固有の軍事的な意味を持つていたことは間違いない。そのあたりのところを具体的に述べてみよう。

了俊が京を立つときから、最初の目的地と定めていたのが尾道であつた。尾道に到着したのは遅くとも二月の末、そこから沼田に移つたのが五月十九日。ということは、閏三月を入れると、実に四カ月近くをこの地で過ごしたことになる。尾道滞留中の行動が、いかに今回の旅の重要なカギを握つていたかを示すものであろう。その行動とは、国内の領主の動員工作を指すことは二節で述べたとおりであるが、それが備後国内だけにとどまらず、そこを拠点として安芸国に及んでいた点も注目される。

たとえば、次に掲げる史料¹⁶⁾を見てみよう。

當國¹⁶⁾藝州守護職被仰付候之間、近日可罷越候之處、三吉式部入道違背御教書候之間、致其沙汰候、庶子一族有御同道、御出備後杭庄候者、本意候、諸事可申談候之間、如此申候、同候者、無延引急速御渡候者、悦入候、恐々謹言、

卯月十六日

了俊（花押）

熊谷彦四郎入道殿

この文書は、尾道滞留中の了俊が三入荘の熊谷彦四郎入道（直氏）に充てて、安芸守護職に補せられ近々入国の予定であることを告げ、ついては談合のためとり急ぎ備後杭庄まで出向するよう求めたものである。二月の下向に際し

て芸備両国の守護職を与えられた了俊は、備後入りと同時に安芸国も含めて活発な軍勢催促の手配を開始したのである。しかし、その史料でも三吉式部入道（道秀）が呼び掛けにに応じていないように、必ずしも了俊の思惑どおりに事は運ばなかった。ちなみに道秀は、了俊に随って九州在陣中の山内通忠の隙を窺い、その本領地毗莊に乱入するなど、⁽¹⁷⁾以後も抵抗姿勢をとり続けている。また熊谷直氏にしても、のちに了俊によって彼の所領が闕所とされ、熊谷宗直に兵糧料所として預け置かれていたことからすると、⁽¹⁸⁾さきの招きに対し素直に応じたとは考えがたい。了俊が「みだれたる世」と概嘆するのも、まことにもつともなことであつた。

一方、芸備両国の領主の側にも、簡単に了俊の動員命令に服するわけにはいかない事情があつた。ちやうど応安四年のころといえ、永らくこの地方に勢力を張っていた直冬党が解体し、天下三分の形勢による権力の深刻な分裂状況にもようやく修復の兆しが見えはじめる時期であつた。これまで合戦に明け暮れていた芸備の領主たちは、このあたりでじっくり腰を据えて在地支配の脆弱さを克服し、また近隣の領主との抗争に備えつつ、国人領主としての自立を図ろうとしていた。それゆえに、彼らの多くは「遠遠渡海」を余儀なくされる了俊の供奉命令に強い抵抗を示したのである。⁽¹⁹⁾

苦心の末に芸備国人領主の動員工作になんとか目処をつけた了俊は、尾道からわずか一日の行程にすぎない安芸国の沼田に居を移す。そこでの三カ月余（五月十九日～八月二十九日）は、了俊の立てた九州攻略方針に沿って軍事行動が開始される時期にあつてた。子息義範が田原氏範らとともに豊後高崎城に向けて尾道より乗船したのは六月二十六日のことであり、⁽²⁰⁾肥前松浦に向かう予定の弟頼泰が渡海準備のため赤間関に下つたのもやはりこのころである。⁽²¹⁾当然のことながら、この時期の了俊の目は九州に注がれる。義範の出発に際し阿蘇惟村に合力を依頼しているのを始めとして、⁽²²⁾肥前の斑島女地頭や豊前の愛智義成・宇都宮経景の忠節を褒し、⁽²³⁾大友氏の一族戸次直光には彼の希望する筑後守護の補任を幕府に吹挙すべきを約している。⁽²⁴⁾後方から九州の戦況を見やりながら、軍勢の配備をすすめ、作戦遂行に必要な布石を打っていく、それが沼田滞留中の了俊に課せられた仕事であつた。

ところで、この時期の了俊の関心事をもう一つ挙げるなら、それは造果保（東広島市高屋町造賀）をめぐる小早川宗平と敵島了親との争いに代表される安芸国内の動きであろう。そこでの抗争の経緯を簡単に振り返ってみると、次のようになる。造果保は建武三年（一三三六）五月、再挙東上中の足利尊氏により敵島社造營料所として寄進されたが、⁽²⁵⁾文和三年（一三五四）に足利義詮が勲功の賞としてそ

れを小早川氏平に預け置いたこと⁽²⁶⁾から、領有をめぐる相論が持ち上がった。そして応安元年（一三六八）ごろになると、大内弘世と結んだ了親が武力攻勢に転じ、普浩（氏平）や子息宗平のたび重なる訴えにより幕府の裁定も下されたが、容易に決着はつかなかつた⁽²⁷⁾。そこには、守護武田氏と有力国人小早川氏の永年にわたる反目、安芸国への進出を窺う大内氏と敵島神主家の連携といった、安芸国内の新旧さまざまな問題が絡み合っていたのである⁽²⁸⁾。かつて了俊自身も引付頭人として造果保に関する幕府裁定の施行を行ったこと⁽²⁹⁾があり、沼田からも近く、目下その編成に腐心している安芸国人領主どうしの争いともなれば、当然見過ごしにはできなかつたはずである。

了俊は安芸国でもう一カ所、海田に二十日間（八月三十日〜九月十九日）留まっている。この滞留がいったい何を意味するのか、現在残されている史料からは明らかにすることはできないが、いちおう考えられるとすれば、そこが国府や守護所に近い安芸国の中心部であること、それと「今朝（筆者注、九月二十一日）さゝいの浦をいでつる友の大船ども」とあるように、軍船の出発時期をうかがっていたことなどであろう。

そして、次が周防国府における滞留（九月二十四日〜十月七日）となる。ここでの最大の目的は、大内氏の協力を求めることであつた。この当時の大内氏は弘世の代であり、

正平十八年（一三六三）に將軍足利義詮より防長両国の守護職補任の約束をとりつけ、幕府方に転じていた。地理的な位置関係からいって、大内氏は九州に依然根強い勢力を有した南朝方に対抗する幕府方の最前線として重要な役どころを負つたが、その勢いに押されてしばらくは石見・安芸方面の経略に力を向けていた。このたびの了俊による九州鎮定構想の成否は、ある意味で大内氏の協力如何にかかっていたといつても過言ではなかつた。約半月にわたる国府滞在期間中、了俊は弘世に援を請い、頼泰の娘と弘世の子息義弘の婚儀をととのえ、義弘は四千の兵とともに了俊に随逐することになる⁽³⁰⁾。

長門国で過ごした二カ月余は、最終的な軍勢の配備と自らの渡海準備に要した時間であつた。国府滞在中（十月九日〜十一月二十九日）には延び延びになっていた頼泰の肥前松浦への出発を見届け、赤間関へ移つてからは芸備国人領主らの集結を待つて、あらかじめ調べていた軍船に分乗し、十二月十九日に門司赤坂の陣に向けて押し渡つたのである⁽³¹⁾。

四 波 紋——地域の視座から——

京を出立してから渡海までの間に一年近くもかけた了俊であるが、いったん九州の地に足を踏み入れると、それま

では打って変わって果敢な動きを示し、応安五年（一三七二）八月には征西府の根拠地大宰府を陥落させるなど、着々と九州経路の実を挙げていった。しかし、その後は菊池氏の頑強な抵抗に遭って、筑後・肥後あたりで一進一退の攻防を繰り返し、合戦は次第に長期化の様相を帯びるようになった。その間、了俊に随って渡海した芸備国人領主たちの内のある者は討死を遂げ、また留守中に本領を侵略される者も相次いだ。長期にわたる在陣は、彼らの上にさまざまな影響をもたらしたのである。本節では、こうした了俊の九州下向によって生じた波紋を芸備地域に視点を据えて述べることにしたい。

まず初めに、九州に出陣したことの確かめられる芸備国人領主を列挙し、その戦跡をたどってみよう（表1参照）。

〔安芸〕

吉川氏 大朝新莊地頭吉川経見は、応安四年十二月十九日の門司関渡海より了俊に供奉し、翌五年二月に行われた筑前麻生山の多良倉・鷹見嶽両城合戦を皮切りに、小倉・宗像から佐野山へと大宰府攻囲の陣に加わった。⁽³²⁾ ふたたび永和二年（一三七六）九月二十七日に渡海した経見は、頼泰の麾下に属して筑前嶋山から蟻打において戦功を挙げ、筑後川を渡って高良山に到り、さらに肥後山鹿に陣した。⁽³³⁾ また、庶子の経中・経重・経房（代官弥重弘清）・千鶴丸（同須藤景平）・虎熊丸（同市原経頭）らは、永和三年八

月二十五日に肥後板井原に参陣してから目野の陣に移り、藤崎城の救援に向かう大内義弘に供奉した。⁽³⁴⁾

熊谷氏 三節でみたように、九州下向の途次、尾道に滞留中の了俊は熊谷直氏を麾下に誘っているが、これは結果的にはうまくいかなかったらしい。熊谷氏の一族で九州に出陣したことが確かめられるのは宗直である。宗直は了俊とともに渡海して以後、応安六年頃までその幕下にあつて転戦している。⁽³⁵⁾ さらに永和四年二月には宗直の代官熊谷直忍が肥後目野に参陣、同年五月より翌年二月まで筑前岩門城の警固にあつたのち、ふたたび目野にもどり、頼泰の馬廻りとして忠勤を励んだ。⁽³⁶⁾

毛利氏 芸備国人領主の中で、いち早く了俊の誘いに応じ、しかも長期にわたって九州在陣を遂げた代表格が毛利元春である。彼のしたためた軍忠状をもとに、その戦跡をたどると次のようになる。⁽³⁷⁾

応安四年十二月十九日、了俊に随って渡海した元春は、翌五年二月の筑前麻生山の鷹見城合戦において、少弐冬資の軍勢が敵方の切り崩しにあうなかを奮戦し、ついで小倉・宗像・皆内・高宮の陣に加わった。四月から八月までは大宰府北方の佐野山に陣を進めた了俊のもとで合戦に臨み、大宰府陥落後には大内弘世の帰国により味方に動揺が広がるのを見て、肥前城山に陣を移すことを了俊に進言し、筑後高良山に拠る懐良親王らと対峙した。その後しばらく

表1 芸備国人領主の九州転戦年表

年・月・日	事 項
応安4(1371)・12・19	九州渡海、門司・赤坂に陣す〔毛利・熊谷・吉川・長井・山内〕。
応安5(1372)・2・10	筑前麻生山の多良倉・鷹見嶽を陥落させ、ついで小倉・宗像・皆内・高宮に陣す〔毛利・吉川・長井・山内〕。
”　　・4～8	筑前佐野山に陣す〔毛利・長井・山内〕。
”　　・8・12	大宰府を陥落させ、ついで陣を肥前城山に移す〔毛利・長井・山内〕。 (大内弘世・義弘父子帰国)
応安6(1373)・3・	肥前宮浦・由比・雲上に陣す〔毛利・長井〕。
”　　・4・8	今川氏兼(了俊弟)とともに肥前所隈に陣す〔毛利・長井〕。
”　　・7・	肥前本折城に兵糧米を運び入る〔毛利〕。
”　　・10～閏10	肥前城山の陣および筑前神山城の警固にあたる〔山内〕。
応安7(1374)・1・	氏兼とともに豊前城井を攻む〔長井〕。
”　　・4・	筑前管生の陣より筑後川を渡り生葉村に打ち入る〔山内〕。
”　　・7・	(大内弘世、毛利親衡と同心して元春領内に打ち入る) (三吉道秀、山内通忠の本領地毗荘に乱入す)
”　　・8～9	筑後福童において合戦、ついで八町島に陣す〔毛利・山内〕。
”　　・11～12	今川義範とともに筑後川を渡って皆尾山に戦い、ついで黒木・谷河等に陣す〔毛利・長井・山内〕。肥後大戸山関・岩原山の陣にて警固を勤む〔山内〕。
応安8(1375)・3・	肥後山鹿・龍作山・水島に陣す〔毛利・長井〕。
”　　・8・29	長井貞広、筑後山崎において討死を遂ぐ〔長井〕。
”　　・9～10	水島退陣後、筑後瀬高・蒲池・酒見から肥前府中・横大路を経て塚崎に到る〔毛利〕。
永和2(1376)・4・	(毛利匡時・直元、弘世と同心して元春の子息広房らの立て籠もる小手崎城を攻撃す)
”　　・9～	再度の渡海後、筑前鷗山の陣・肥前蟻打に戦功を挙げ、筑後川を渡り高良山に供奉す〔吉川〕。 (宮氏、田総能里の本領長和荘東方・石成荘下村を違乱す)
永和3(1377)・8・12	肥後臼間野白木原の合戦において戦功を挙ぐ〔毛利〕。
”　　・8～	肥後板井原に参陣、ついで目野山に宿直す〔吉川〕。
永和4(1378)・2～	肥後目野に参陣、ついで筑前岩門城の警固を勤む〔熊谷〕。
”　　・3～	大内義弘の肥後藤崎城救援に供奉し、その警固にあたる〔吉川〕。

は筑後川を挟んで両軍の攻防が繰り返される。元春は応安六年七月、敵方に包囲され没落寸前となっていた本折城の救援に向かい、危難をかいくぐって城内に兵糧米を運び入れることに成功しており、翌七年には筑後川を渡って攻めてきた南軍を福童・八町島の陣で迎え撃っている。応安八年になると、菊池氏の撤退にともない抗争の舞台は肥後国へと移っていく。了俊は山鹿・龍作山・水島と陣を進め、菊池氏をあと一步のところまで追い詰めたが、水島の会戦を前に功を焦って少貳冬資を誘殺したことから味方の離反を招き、また菊池氏の反撃にあつて九月八日に水島を退陣する羽目となった。こうした一連の合戦においても、元春はつねに了俊と行動を共にしている。

概して了俊への随逐には消極的な姿勢をとる芸備国人領主の多い中で、元春のような存在はむしろ稀な例であった。軍忠状の最後に記された「安藝備後兩國軍勢等、或有不参之輩、或令遅参、結句有帰国仕之輩、或申暇令帰国、重下向之仁等雖其類多、御渡海之最前応安四年十二月十九日門司御陣自御共以来、于今六ヶ年、雖為一ヶ度、不帰国仕、所々御陣致忠事、於兩國之仁等中者、限元春一人之間、殊為忠節者也」という言葉は、そうした彼の面目をよく伝えている。

厳島神主 造果保をめぐる小早川宗平と厳島了親の相論に裁許を加えた応安六年（一三七三）七月十九日の室町幕

府下知状写によれば、宗平の知行を安堵したあとに「次了親罪科事、雖可被収公所帶、可発向九州之旨、申賜御教書之上者、宜被免除」と記されており、了親の下向が推定される。⁽³⁸⁾

〔備後〕

長井氏 長和荘北方・信敷荘西方地頭職を有していた長井貞広の軍忠状には、応安四年十二月の渡海から同八年の肥後入りに至るまでの足掛け五カ年に及ぶ戦跡が記されている。⁽³⁹⁾ それを見ると、前述した毛利元春の場合とたいへん似通っていることに気づく。鎌倉時代の備後守護家である長井氏は、毛利氏とは大江広元を祖とする同族であり、且またこのとき縁戚関係にもあつたことから、九州転戦中ずっと同一行動をとっていたのであろう。

しかし、二人の運命は応安八年の水島退陣の時期を境にして対照を描いていく。すなわち、元春が了俊とともに筑後の瀬高・蒲池・酒見を経て肥前に遁れ、その後は無事帰国を果たしたのに対し、⁽⁴⁰⁾ 南軍の鎮定に向かった貞広は、八月二十九日に筑後山崎の地において討死を遂げることとなる。⁽⁴¹⁾ 九州出陣に先立つ応安四年十月一日、それまで実子に恵まれなかった貞広は、不測の事態に備えて元春の五男毛利広世と父子契約を結び後事を託していたが、⁽⁴²⁾ その杞憂が皮肉なことに現実のものとなったのである。

田総氏 長井氏の一族で田総荘を本拠とした田総能里

は、鎮西発向の御教書に応じ在陣九カ年に及んだという。⁽⁴³⁾

山内氏 地毗莊地頭山内通忠の戦跡は、応安八年（一三七五）正月の軍忠状に詳しい。⁽⁴⁴⁾ それによると、応安四年十二月の渡海以後、翌五年二月の筑前麻生山合戦に始まって、小倉・宗像・皆内・高宮・佐野・高取山と陣を進め、八月十日の天山（天拝山）、十一日の内山（有智山城）攻略といった大宰府包囲戦に参加している。また応安六年には肥前城山の陣や筑前神山城などの警固にあたり、同七年は筑後川を挟んでの攻防に明け暮れている。

以上、芸備国人領主たちの戦跡を一通り見てきたわけであるが、彼らの在陣が長引けば、当然そこからさまざまの問題が生じてくる。長井貞広の討死にともなう備後の名流の断絶もその一つであるが、無事帰国した者についても、そのほとんどが留守中に本領を侵略されるなど、影響は広い範囲に及んだ。

たとえば毛利氏の例でみると、元春との間で多年にわたる骨肉の争いを繰り広げてきた父の親衛が、大宰府陥落後に帰国し反幕府の態度をとるようになった大内弘世と同心して元春の本領吉田郷に打ち入り、親衛の死後は、その遺志を継いだ匡時・直元が兄元春に反攻を企て、大内勢と結託して元春の留守を預かる子息広房・広内らを窮地に追い詰めている。⁽⁴⁵⁾ 山内氏の場合も、かねてより地毗莊への進出の機をうかがっていた三吉道秀が、通忠の九州在陣の隙を

ついで乱入しており、⁽⁴⁶⁾ 田総能里は九カ年に及ぶ在陣中に本領の長和莊東方・石成莊下村を宮次郎左衛門尉の違乱にあっている。⁽⁴⁷⁾

こうしてみると、毛利元春が軍忠状の中で述べるような、不参（代官派遣を含む）、遅参、帰国といった芸備国人領主たちの出陣忌避の態度は、彼らの置かれた立場からすれば確かに故なしとしないものがあつた。武田・小早川・宮・三吉ら、守護・奉公衆系の有力領主の多くが不参加を決め込むなかで、あえて戦陣に身を賭していったのは、それなりの思惑と覚悟に支えられた者たちであつた。やがて彼らは帰還すると、領主制の内部強化に乗り出し、さらに国人領主相互の連携を軸とする新たな政治的な枠組みを摸索し始める。その意味で、南北朝内乱後期の芸備両国の動向は、九州探題今川了俊の下向をめぐる展開したといつても過言ではないのである。

註(1) (応安三年)六月二十六日、赤松則祐書状(「入江文書」、『南北朝遺文 九州編』へ以下、『南遺九州』と略す)四八二(三三三)号)。

(2) 今川了俊書状(「岡本文書」、『南遺九州』四八二(四四)号)。

今川了俊書状(「田原文書」、『南遺九州』四八二(五五)号)。

(3) 今川了俊書状(「佐田文書」、『南遺九州』四八二(二二)号)。

(4) 応安三年十二月二十六日、室町幕府御教書(「佐田文書」、『

「南遺九州」四八五〇号)。応安三年十二月二十六日、室町幕府御教書写(「碩田叢史所収富来文書」、「南遺九州」四八五一号)。

(5) (応安四年)正月二日、今川了俊書状写(「阿蘇文書」、「南遺九州」四八五四号)。(応安四年)正月十一日、今川了俊書状(「都甲文書」、「南遺九州」四八五五号)。応安四年正月十一日、今川了俊書状写(「真玉氏系譜所収文書」、「南遺九州」四八五六号)。

(6) 「武庫」地名の由来とされる埋兵伝説は、たとえば「逸文撰津国風土記」に「皇后到撰津国海浜北岸広田郷、今号広田明神是也、故号其海辺、曰御前澳、又埋其兵器処、曰武庫兵庫」と見える。また、「日本書紀」神功皇后撰政元年二月の記事によれば、皇后が忍熊王を討つため穴門豊浦宮より海路攻め上ろうとした際、難波の近くまで来て船が進まなくなり、いったん武庫の水門に引き返し神を祭ると、ふたたび船の進むことを得たという。

(7) 「武庫の浦の入江の渚鳥羽ぐくもる君を離れて恋に死ぬべし」(「万葉集」巻十五―三五七八)。

(8) 「伊勢物語」八十七段。

(9) 生田川伝説については、高橋虫麿の長歌「菟原処女の墓を見る歌」(「万葉集」巻九―一八〇九)や「大和物語」百四十七段に見える。

(10) 「印南野の浅茅おしなべ宿る夜の日長くあれば家し偲はゆ」(巻六―九四〇)、「家にして吾は恋ひなむ印南野の浅茅が上に照りし月夜を」(巻七―一七九)。

(11) 佐藤進一「室町幕府守護制度の研究」下巻「備後」の項。

(12) 嘉禎四年十一月十一日、一条入道太政大臣藤原公経家政所下文案写(「小早川家證文」四号)。

(13) 「平家物語」巻九(六ヶ度軍)に「能登守讃岐の八嶋へ渡り給ふと聞えしかば、河野四郎通信、安芸国住人沼田次郎は母方の伯父なりければ、ひとつにならんとて、安芸国へをしわたる、能登守是をき、やがて讃岐八嶋をいでておはれけるが、すでに備後国養嶋にかゝつて、次日、沼田城へよせ給ふ、沼田次郎、河野四郎ひとつになつてふせきたゝかふ、能登殿やがて押寄責給へば、一日一夜ふせきたゝかひ、沼田次郎かなはじとや思ひけん、甲をぬいで降人にまいる」とある。

(14) 川添昭二「今川了俊」八九頁。

(15) 応安八年二月日、田原氏能軍忠状(「入江文書」、「南遺九州」五一七一号)。

(16) (応安四年)四月十六日、今川了俊書状(「熊谷家文書」二二二号)。

(17) 応安七年八月三日、將軍家御教書案(「山内首藤家文書」五八号)。永和二年三月日、山内通忠代頼賢支状(同上六二号)。

(18) 応安六年二月五日、今川了俊預ケ状(「熊谷家文書」九三号)。

(19) 「山内首藤家文書」六二号。

(20) これに合わせて備後国に馳参した都甲三郎四郎充ての了俊感状(「都甲文書」、「南遺九州」四八七四号)も残って

いる。

- (21) (応安四年) 八月三日、今川義範書状写(「阿蘇家文書」
「南遺九州」四八八八号)。また、十一月十九日の松浦入
りの前から頼泰と行動を共にしてきた橋公与が、七月九日
に安芸国に馳参したことを述べており(「橋中村文書」
「南遺九州」四九四九号)、頼泰の赤間関下着もだいたいこの
頃であろう。
- (22) (応安四年) 六月二十五日、今川了俊書状写(「阿蘇家文
書」
「南遺九州」四八七五号)。
- (23) 応安四年七月二十二日、今川了俊感状(「斑島文書」
「南遺九州」四八八三号)。(応安四年) 八月九日、今川了俊書
状(「佐田文書」
「南遺九州」四八八九号)。
- (24) (応安四年) 八月十八日、今川了俊書状写(「立花文書」
「南遺九州」四八三一号)。なお、佐藤前掲書「筑後」の
項参照。
- (25) 建武三年五月一日、足利尊氏寄進状(「厳島神社御判物
帖」五四号)。
- (26) 文和三年十二月二十九日、足利義詮御判御教書写(「小
早川家證文」四八八号)。
- (27) 「小早川家證文」四九一、四九六号。
- (28) 応安六年七月十九日、幕府裁許下知状写(「小早川家證
文」四九七号)。
- (29) 註(28)と同じ。
- (30) 松岡久人「大内義弘」七九、八〇頁。また、「応永記」
には「仍今川伊予入道ヲ為探題雖被差遺、其勢僅二三百余
騎、微力ニシテ不能令渡海九州、然間致合力可免向九州之
由蒙上命、某十六ニシテ率四千余騎、探題相共ニ渡海九州」
とある。
- (31) 安芸の毛利元春(「毛利家文書」一三三号)・熊谷宗直(「熊
谷家文書」九四号)・吉川経見(「吉川家文書」三三三号)、
備後の長井貞広(「萩藩閔録」卷八ノ二)・山内通忠(「山
内首藤家文書」五四号)、石見の周布兼氏(「萩藩閔録」
卷一、二一ノ一)らが、このとき一緒に渡海している。
- (32) 応安五年六月日、吉川経見軍忠状(「吉川家文書」三三
号)。
- (33) 永和三年正月日、吉川経見軍忠状(「吉川家文書」三四
号)。(永和三年三月日、吉川経見軍忠状(同上二五七号)。
- (34) 永和四年八月日、大朝莊一分地頭虎熊九代市原経頭軍忠
状(「吉川家文書」一〇五六号)。(永和四年三月日、大朝莊
庶子千鶴丸代須藤景平軍忠状(同上二〇三三号)。(永和四
年三月日、但馬経中軍忠状(同上二〇四号)。(永和四年
三月日、吉川経重軍忠状(同上二〇五号)。(永和四年十
月十三日、吉川経重軍忠状(同上二〇六号)。(永和四年
八月日、大朝莊一分地頭甲斐守経房軍忠状(同上二〇八
号)。
- (35) 応安六年九月四日、今川了俊感状(「熊谷家文書」九四
号)。
- (36) 永和五年四月日、熊谷宗直代同直忍軍忠状(「熊谷家文
書」九六号)。(康暦元年九月日、熊谷宗直代同直忍軍忠状
(同上九七号)。

- (37) 応安七年七月日・永和二年三月日、毛利元春軍忠状案
 『毛利家文書』一三三号)。
- (38) 註(28)と同じ。
- (39) 応安八年八月日、長井貞広軍忠状(『萩藩閥閥録』卷八ノ二)。
- (40) 註(37)と同じ。
- (41) 永和二年六月日、長井広世軍忠状(『毛利家文書』一三八五号)。
- (42) (応安四年)十月一日、長井貞広書状(『毛利家文書』一三八二号)。
- (43) 康暦三年二月日、田総能里申状案(『田総文書』)。
- (44) 応安八年正月日、山内通忠軍忠状(『山内首藤家文書』五九・六〇号)。
- (45) 毛利元春自筆事書案(『毛利家文書』一五号)。
- (46) 註(17)と同じ。
- (47) 永和三年三月十日、今川了俊遵行状(『早稲田大学附属図書館所蔵文書』)。